

近未来金融システム創造プログラム第6回講義レポート

第6回目の講義はハゲタカなどの作品を執筆した小説家の真山仁氏にお越しいただいた。真山氏の小説家という視点から日本の経済はどう見えているのか、そしてAIなどのイノベーションが進む近未来の金融をどう考えるのかについて一問一答形式で講義をしていただいた。

ハゲタカ、とはいったい何だったのか？

平成とは、日本にとってなんだったのか？

日本人は何かにつけて「侍」といった言葉を使いたがり、潔く落とし前をつけるといったイメージがついているはずなのに、現実には世界で一番落とし前をつけることが下手で、問題を先送りにしてしまっている。「水に流す」という表現が通用するのも日本のみであり、問題を先送りにした結果、バブルが崩壊してしまった。いつものように失敗を誰かのせいにしていたが限界に達してしまい、企業が駄目になったときに飛んでくるハゲタカファンドに責任を転嫁しようとした。

「落とし前をつける30年間」であった平成には課題が残ったものの、年号が変わったことは若い世代が大人に取って代わることのできるチャンスである。新しいものを探して旧態依然としたものをディスラプトすることが求められている。

なぜ、主人公鷺津の人間性を小説で描けなかったのか

主人公は読者に感情移入してもらうのが普通ではあるが、ハゲタカでは主人公である鷺津以外の複数の視点登場人物が葛藤する様子を描いている。そのため主人公の鷺津は内面を出さないほうが引き立つと考え、手法の一つとして鷺津には社会を冷徹にみるカメラの役割を持たせ、あえて感情を入れていない。

人間の欲望について『ハゲタカ』から見えたもの

人間は欲望がなければ前に進むことができないため、ハゲタカでは欲望を悪いものとして表現していない。しかし、日本では欲望を前面に押し出すことは忌避されるため、普段欲望を抑え込もうとして変なところで悪いことに手を染めてしまう。中国の躍進と共に訪れた日本の停滞は、「欲しいものがあるかどうか」、といった物的欲求の強さの違いということが非常に顕著に表れている。経済は欲望の結果であり、欲望の力を止めることは不可能であることを小説であれば表現可能だと考えた。

資本主義をどう見るか

誤解されることが多いが資本主義と民主主義は同義ではない。どちらの考え方も欲望のルールを作っているだけなので善悪といった考え方は存在しない。日本においては道徳が

価値観として先行してしまうので、資本主義国家であるものの、根本的に資本主義になじまないのではないかと。その意味で現状の日本を考えると、資本主義を前提として話すことには違和感がある。

金融界を舞台にした小説を書こうとしたきっかけは？

生命保険についての小説を書こうとしたことが最初のきっかけ。社会について理解を深めたいと思ったときに、お金の流れと人の欲望について理解しなければならないと考えた。そうしたお金の影響される人や社会について書いたのが『ハゲタカ』である。

・金融は社会や組織（企業を変えた）

・テクノロジーは社会や経済を変えるか？

・データは社会・経済の中で何を変えるか？

・データは「お金」に取って代わるか？

人間は火というテクノロジーを使えるようになったために動物の王者になることができた。現代のテクノロジーもあくまで道具であるが、そのテクノロジーに人間が支配される世界（ディストピア）のちょうど分岐点に立っている。人間はテクノロジーの進化に伴って時間の短縮に成功し、余剰時間を得ることができるようになったが、それを認識していないと人生が無味乾燥になってしまうように思う。

データに関して、そもそもお金自体が代替品であり、交換性が担保されていれば良いので、データの中身が貨幣よりも有用でありさえすれば十分に代わり得る。

社会に必要な基盤にお金が回らない状況は、これから変わるか？

社会保障やインフラを改善するのは国の仕事であるものの、現在では歳出が大きすぎるため難しい。今後は、今まで国が請け負っていた公共事業をプロジェクトファイナンスにして、民間にやってもらうことが望ましいのではないかと。そのプロジェクトファイナンスに国のお墨付きをつけることで、有事の際にはサポートをできる体制を整え、レバレッジのきいた投資をできるようにすることが必要になる。四半期に一回利益が赤字か黒字かを追求するのではなく、借金をしても10年くらい待ってもらえるレベルのリスクテイクをうまく国がバックアップすることによって、お金が回っていくのではないかと。国が仕事を民間に委譲する際にもただ任せきりで終わりなのではなくて、「勝手なことはさせない」ということを念頭に置いたうえで委譲することが望ましい。

「電子政府」をどう見たらよいか

テクノロジーは過信されていないか

合理主義的な国ほど電子政府が合うと思う。日本は1つの場所に集約して管理されるこ

とを非常に嫌う国民性だが、例えばシンガポールは国全体が非常に合理的である。しかし、シンガポールも日本を見て自分たちの合理主義が本当に自由なのか疑問を持つ人も現れており、逆に日本は自由すぎるがゆえにルールを求めている傾向にある。テクノロジーはあくまで人間と併走すべきであり、過信してはいけない。

大組織や社会の Disruption (創造的破壊) は本当に起こるのか？

起こるとしたら、どのような条件のもとで起こるのか

ディスラプションは起きなくてはならないと考える人がいる一方で、多くの人にとって必要とはされていない。また、日本は地方での生活の満足度がある程度高い国であるため、そこそこの生活が良ければ地方に移住すればよく、大組織のディスラプションの実現は非常に難しい。

新興国 vs. 欧米先進国

世界の主役交代が起こるとすれば、どうやって起こるか？

新興国は政治が安定していけば、人口ボーナスによって進歩していく。穏やかに生きたい先進国と野心のある新興国では 100 年間に主役は自然と変わっているのではないか。

古い金融機関に役割は残されているのか

金融機関の古い新しいは、テクノロジーが新しいものか古いものかの違い。本質は金を貸すことであり、そこに新旧はないため、古い金融機関の仕事も十分に重要な役割を持っている。しかしリスクを取らない企業は、今後の競争には生き残れない可能性が高い。

中小企業の事業性・将来性はどのようにしたら見えるのか？

生き残れない企業は生き残らないほうがいい。何を残すべきなのかを企業のトップが理解していないことが問題である。同じ中小企業同士の連携考えることができるプロデューサーの存在が必要であり、企業同士の横のつながりを模索することが必要になってくるのではないか。

金融・テクノロジー・政治に共通する「胡散臭さ」はどこから来るのか？

目に見えないもの=胡散臭いのか？

胡散臭いと感じるのはそれに対する敗北感に由来している。欲望の経済の中で勝ち残っていくためには胡散臭いこともやらなければのし上がることができず、フェアに勝ち残るには相当強くなければならない。目に見えるものだけを信じてしまいがちだが、実際は見えていない原因やプロセスが大切であり、それをどうやって見ていくのが重要である。「胡散臭い」で片づけてしまうと思考が停止してしまうので、目に見えないものを追求して考え抜いていくことが必要になる。

「上手に人を巻き込んで、きちんと筋を通していくと人は動く」

常に能動的に相手へ投げかけて、腹を割って追及していくことが人を巻き込むコツである。言ったことは頑張る。できるだけ皆でやりつつ自分はおだて役に回ること。一方で良いことをひらめいたとき、それを相手は理解してもらえない場合も多いが、そのときに理解してもらえないことに対して落ち込んでしまうのではなく、どうして思いついたのかを相手に伝え、理解してもらうことで熱狂を共有することが大切。

テクノロジー×金融

社会・経済のあり方を変えるか？

社会や経済があり方を変えたいのか原因を究明して、その解決策がテクノロジーや新しい金融でなければならない。どこを変えるべきなのか、何を变えたいのかを掘り下げて考えるべき。

そこに危機はあるか？

危機感成長に必要な要素であり、危機があるかというよりも、それを見つけられるかということに焦点を当てるべきである。また、物事を考えるときに想像力は必要なのだが、想像するということが大切なのにそこに喜びを見いだせなくなっている。想像することによって社会の様々なことに危機を見出すことができ、危機はたくさん存在するという自覚を持たなくてはならない。

Q&A

Q. テクノロジーの権力性について、法律や規制が人々をモデレートに支配している監視が強まる社会の中で今までのテクノロジーとどう違うのか

A. 法律がテクノロジーについていけていない。よくも悪くも SNS が発展してきたので、今ある仕組みを絶対守るようになった。テクノロジーはすべてが合うか拒絶するかの両極端である。誰が仕組みを作っただれが幸せになるのかわからなくなっており、不特定多数の幸せに人間が入れなくなっているのではないか。

Q. 人間が主体でテクノロジーを作っているのもまだテクノロジーが人間を支配しているとは言えないのではないか

A. 実際に使用し、その時々で製造サイドは理解しているが一般の使用者は理解できていない。判断する立場の人が 100%の理解をできていないのが問題である。